

序

悪性腫瘍の診断と治療は、近年の臨床医学の中で重要な部分を占めている。他の疾患が臨床的にも基礎的にも研究の進歩によつて治癒率が高くなつている中で、癌はなおらないという印象を与えているからであろう。

臨床的には皮膚癌が煙突掃除人に多いという報告が1775年に出ているが、実験的に癌を発生させることはなかなかできなかった。1914年になつて、山極・市川によつて動物に癌を発生させることに成功してから、発癌物質や、発癌機構の研究が行なわれるようになった。比較的最近になつて、分子生物学、量子生物学というような分子レベルの研究が進み、基礎医学の中に取り入れられ、抗癌剤や放射線学の進歩と相まつて、悪性腫瘍の研究が急速に発展したといえよう。一方ウイルスと発癌との関係も古くから論じられていたが、Epstein, Barr がバーキット腫瘍でウイルスを発見したことから、臨床医学との関連ができて、診断にも治療にも応用されるようになってきた。このウイルスが上咽頭腫瘍に関係が深いことは、既に報告されている通りである。

悪性腫瘍の報告は本誌をみても、毎年約10余例の報告が出ている。その診断も病理組織学的に確認することから、X線診断、シンチグラム、超音波と、各方面から追求されているが、最近ではさらに免疫学的な手法も行なわれている。治療方法も、手術かX線治療かという論争の後に、抗癌剤による三者併用療法に発展した。最近の基礎医学の進歩はさらに新しい進展を診断にも治療にももたらすであろう。

早期診断、早期治療はすべての疾病に対する原則であるが、悪性腫瘍では特に切実な響きを持つている。それは直接生命に繋がるからである。

問診、視診、触診、X線、内視鏡、病理組織検査というような、耳鼻科医にとつて基本的な診断技術ばかりでなく、物理的、化学的、さらに進んでは血清学的、分子生物学的診断も有効になるときがくるであろう。悪性腫瘍の診断、治療には千差万別の病態に対処し得る豊富な知識と工夫が必要とされる。この時期に、悪性腫瘍研究の現段階を知つておくことは大きな意味を持つと考えたのである。

本誌は臨床報告に重点を置いているので、臨床例の報告はみられるが、基礎医学の領域の報告は少ない。そこでこの特集では特に悪性腫瘍の基礎的な面に重点をおいて第一線に活躍されている研究者の方々にご執筆をお願いした。貴重な原稿を頂いた諸先生に深甚の謝意を表するものである。

悪性腫瘍の研究に捧げられている各分野の成果は、現在の医学の最高峰を示しているともいえる。ここに収められている論文の中から、医学の発展の方向を汲みとることもできるのではないと思われる。

この特集号が頭頸部腫瘍の臨床と研究発展の礎石となることを願うものである。
(編集委員)